

現代大学生における自己形成とアイデンティティ

—— 日常的活動とその文脈の観点から ——

山 田 剛 史*

現代大学生の日常的な活動は、どのようにして自己形成に関わる活動として機能しているかを明らかにするために、大学生141名に対して質問紙調査を行った。その結果、第1に、自己形成的活動に対する肯定的認知評価と自我同一性との関連がみられたことから、アイデンティティの感覚といった内的な同一性の概念が、外的な活動に対して付与された認知的評価（自己形成）との関連によって形成・獲得されることが示された。第2に、遊び・対人関係の成長志向的な文脈や生活習慣の生活重視的な文脈が充実感や自己受容を支え、授業・講義による将来の見通しの文脈や自己研鑽の成長志向的な文脈が自己目標志向性を支えるというように、自己形成的活動の内容はその文脈によって異なる機能を持つことが明らかにされた。

キーワード：大学生，自己形成，アイデンティティ，日常的活動，文脈

問題と目的

これまでの心理学における自己形成に関する実証的研究では、自己形成は漠然とした形での志向性 (cf. 速水, 1998 ; 梶田, 1988 ; 菊池, 1989) あるいは理想自己に対する志向性 (cf. 安達・菅宮, 2000 ; 井上, 1999 ; 水間, 1998, 2002a) として概ね規定され、検討されてきた。このように、自己形成は対象設定の有無の差こそあれ、概ね“（認知的）志向性”として扱われてきた。山田 (2003) はこうした研究を概観し、第1に、自己形成の対象として認知的（内的）側面への偏重が認められること、第2に、志向性といった目的側面（未来次元）への偏重が考えられるとした。第1の問題に関しては、自己は経験によって形成されるといった指摘 (水間, 2002b) や、人は経験によって、様々な価値や理想、自己概念をつくりあげていき、自己を形成していくといった指摘 (溝上, 1999) から、今後は、内的側面と外的側面両者の相互行為によって自己形成を捉えていくことが重要であると考えられる。これは、自己形成過程について考えていくには、結局、経験世界と自己との相互作用である経験を、個人の経験世界に沿って考えていく視点が必要になるといった指摘 (水間, 2002b) や、青年心理の特質をより深く理解するためには、内面的な感情世界と外側にあらわれる生活態度や行動とのあいだにある有機的な関係を明らかにすることが必要であるといった指

摘 (森野・池上, 1986) も論拠としてあげられる。そこで、本研究は、自己形成を“日常場面における行為や経験といった（外的）環境との関わりをベースとして、その外的活動とそれに付随する内的活動（諸感覚や評価）との相互作用によってもたらされる自己の発達およびその過程” (山田, 2003) と定義し、内的側面と外的側面の相互関係から自己形成に迫ることにしたい。第2の問題に関しては、上記定義によって自己形成を捉えようとすると、ある理想や目標といった未来の認知的対象（自己像）に対する志向性といった目的側面からのみでは捉えきれない青年の存在・自己形成の捉え方を仮定する必要がある。そうした青年の存在は、“人間は、可能性としては自分自身の目指すところへと向かって自らを形成していくことができるが、すべての人が現実にもそのようなあり方を示すというわけでもない”と梶田 (1988) によって指摘されており、また目的側面に捉われない自己形成の捉え方は田井 (1982, 1990) や高橋 (1992) によっても指摘されている。以上から、本研究では、自己形成を目的側面（日常的活動が将来の理想や目標と結びついている側面）と非目的側面（日常的活動が明確に将来の理想や目標と結びついていないわけではなくが現在の肯定的な評価と結びついている側面）の両側面から捉え、そのような肯定的側面によって認知されている活動を自己形成的活動として規定する。

さらに、本論では自己形成と深い関連があり、青年（大学生）を理解する上で重要なテーマであり、これまでに数多くの研究が蓄積されてきたアイデンティティに着目する。アイデンティティ概念は、基本的には

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科
〒536-0014 大阪市城東区鳴野西5-3-1-907
yamatuyo@maia.eonet.ne.jp

Erikson 理論 (cf. Erikson, 1959) に依拠しているわけだが (対置するものとして Marcia のステイタス法 (Marcia, 1966) なども存在するが), その定義における重要な点の一つとして, アイデンティティは一種の“感覚 (sense)”であるということがあげられる¹。そのため, 種々の研究においてはその“感覚”を捉えるための尺度開発 (cf. 宮下, 1987; Rasmussen, 1964; Rosenthal, Gurney, & Moore, 1981; 砂田, 1979) が行われているが, それらの研究では, “その感覚が一体何によってもたらされているのか”についての問いには答えることができないでいる (cf. 谷, 2001)。そこで, そうしたアイデンティティの形成・獲得といった問題に関して, 本研究では先に位置づけた自己形成との関連を想定する。その理由として, アイデンティティといった感覚も先の指摘同様自動的に得られるものではなく日々の生活の中での経験に基づき形成・獲得されることが考えられ, そのことも射程に入れて本研究では, 日常的活動を組み込んだ概念として自己形成を設定しており, そうした自己形成の過程においてアイデンティティといった感覚が形成・獲得されると考えるからである²。そして, 本研究では様々な自我同一性に関する尺度の中から谷 (2001) における多次元自我同一性尺度 (MEIS) を使用する。その理由として, 本尺度は, 従来の自我同一性尺度における問題点を指摘した上で, 信頼性や妥当性に関する詳細な検討がなされていること, Erikson の記述との対応関係を意識した上で, 青年期 (第Ⅴ段階) 固有の自我同一性感覚の多次元性に着目していることがあげられる。

また, 本研究では自己形成の対象となる日常的活動を, 個人にとっての重要性を考慮した形で抽出する。その理由には, Rogers (1951) 以降取り上げられてきた

理想自己と現実自己の不一致と適応をめぐる研究の変遷過程で現れた Moretti & Higgins (1990) の研究があげられる。ここでは, 対象となる理想自己が個人にとって重要なものでなければ適応との関連はみられないことが示されており, その抽出法としてア・プリオリに特定領域を設定しない (“全体性”を考慮した) 自由記述が用いられている。そして, こうした方法は溝上 (1997) によって “内在的視点による個性記述的方法” として位置づけられており, 以降のズレ研究におけるパラダイムシフトを促した。このように個人にとっての重要性を考慮する視点は, ズレ研究のみならず, 適応を問題とする様々な研究においても転用可能な視点であることから, 本論における自己形成の対象となる日常的活動を抽出する際の方法として導入する。さらに, 山田 (2004b) は上記の個性記述的方法によって理想自己の観点から自己形成に関する研究を行っている。そこでは, どのような理想自己を抱いているのかといった視点からではなく, それがどのように意味づけられているのかといった視点から検討されており, その意義が確認されている。また溝上 (2001, 2003) においても, 大学生固有の意味・文脈を考慮した自己研究の積極的意義が見出されていることから, 本研究では, どのような活動をあげているのかといった視点からではなく, それがどのように個人によって意味づけられているのかといった視点 (文脈) から検討する。

以上の議論では, 1. 自己形成を, 目的性—非目的性の両側面を含んだ外的側面と内的側面の相互行為的視点から捉える必要があること, 2. そうして位置づけられた自己形成過程において, アイデンティティといった感覚が形成・獲得されていくということ, 3. 方法論に関する視点として, 個人にとって重要な領域を抽出すること, その背後に存在する文脈を考慮することが重要であることをそれぞれ指摘した。

そこで本研究では, 第1の指摘から, 自己形成の対象 (外的側面) として “活動” の側面に焦点をあて, 自己形成に関わる活動を “自己形成的活動” として位置づける。その際, 全ての活動が自己形成的活動として機能しているとは限らないため, 日常的活動が自己形成的活動として機能しているか否かという視点から捉えなければならない。そこで, 日常的活動が明確な目的意識に基づいているものと, 明確な目的意識には基づいていないもののそれらの活動に肯定的な意味付与がなされているものとを捉えるため, “自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目³” として項目化・測定する。第2の指摘から, 上記尺度と自我同一性尺度との

¹ アイデンティティ研究の全てが “感覚” のみを扱っているというわけではない。例えば, Grotevant (1987) や高村 (1997) ではアイデンティティ形成のプロセスに, 杉村 (1998, 2001) では関係性という視点からみたアイデンティティ形成にそれぞれ焦点をあてた検討が行われている。本研究では, 主に尺度研究の土俵で扱われているアイデンティティ研究の多くが “感覚” として捉えているという意味で使用している。このことと関連して, 岡田 (1998) は, “アイデンティティという概念は, 具体的な行動や態度を記述した概念ではなく, その背後にある茫漠とした, 「様々な場面での」その人の感じ方を記述したものである” と指摘している。

² 自己形成とアイデンティティとの因果性に関して, いずれかが先行要因 (独立変数, 従属変数といった図式) として機能するというよりは, 自己形成過程においてアイデンティティの感覚が培われ, そうしたアイデンティティの感覚によって自己形成の様相が規定されるといった相互依存的因果関係 (循環的因果関係) として両者の関係は位置づけられる。

関連について検討する。そして第3の指摘から、自己形成的活動の対象となる活動およびそれを支える文脈は選択方式ではなく、内在的視点による自由記述方式によって抽出する。

具体的な自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目に関して、3つの下位因子(「充実感」「自己受容」「自己目標志向性」)からなる尺度⁴を作成・使用する。この3側面を取り上げた理由として、「充実感」に関して、大野(1984)は“青年が健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情”を充実感として位置づけ、その充実感を構成するものとして“一般的充実感”といった側面をあげていること、「自己受容」に関しては、梶田(1988)が自己成長的な意欲や態度を基盤的に支えるものとして、“自信と自己受容に関わる軸”を設定していることがあげられる。また、この2側面は“個人が重要視する活動が必ずしも明確な目標を前提としていないにもかかわらず、そこでの活動が個人にとって充実するものであり、またそうしている自分自身を受容しているという意味での自己形成”として位置づけられ、この2側面によって支えられる活動を非目的的な自己形成的活動として位置づける。「自己目標志向性」に関して、これは従来の目的的な文脈での自己形成の捉え方を示すものであり、その重要性は水間(1998, 2002b)や梶田(1988)などで示されている。この側面は“現時点で重要視する活動の前提に具体的ではないにしてもある種の目標や理想が存在しているという従来の意味での自己形成”として位置づけられ、この側面によって支えられる活動を目的的な自己形成的活動と位置づける。

また、本研究では個人の全般的な適応感を測定する自尊感情を取り入れている。これは、現時点における特定領域にとらわれない個人の全体的な自己に対する肯定的／否定的感情的評価を示すものである。本研究で使用する自己形成的活動に対する認知評価項目は、個人にとって重要な活動内容に対する“肯定的な”認

知評価であり、またそこでの対象となる活動は“全体性”を反映させたものとして抽出される。このような性質からも両者の間にはある程度の関連が予想されることから、本研究では自尊感情を使用する。

これらより、本研究では、第1に、具体的な活動を対象として、それに付与された意味づけによって捉えられる自己形成と、アイデンティティとの結びつきについて検討すること、第2に、どのような文脈によって支えられたどのような活動が自己形成的な活動として機能しているかについて検討することを目的とする。

方 法

調査協力者 近畿圏内の大学生141名(男性52名、女性89名)。平均年齢は21.01($SD=3.38$)であった。

調査時期 2002年7月

調査内容 調査内容は以下の提示順序で1冊の冊子として配布した。

(1-1) 日常生活場面における主要な活動内容(3個)を自由記述により表出するよう求めた。指示内容は「日々の生活場面において、あなたが実際に行っている様々な活動や関わっていること、あるいは取り組んでいることの中で、特に重要だと思っていることについて、以下の空欄に記入して下さい」であった。

(1-2) 上記3つの記述内容より、以降の分析で対象となる活動を限定するため、さらに最も重要と思われる内容1項目を選定するよう求めた。

(2) 重要活動の選出理由の記述(文脈の抽出)

上記(1-2)で選定した内容の選定理由を自由記述により表出するよう求めた(3個)。指示内容は「(1-2)で選択した活動内容があなたにとってなぜ最も重要であるのか、その理由について以下の空欄(1, 2, 3)にできるだけ詳しく記入して下さい。なお、記述の仕方は、まず1に理由を記入し、さらに1の理由を2に、そしてさらに2の理由を3に記入して下さい⁵」であった。

(3) 自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目

本研究では、自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目を“日常生活において行われている活動に対して付与される肯定的認知評価”と位置づける。そのため本尺度では、実際に個人によって表出された重要な活動内容(上記1-2に相当)を当てはめ回答するという形式を取る。例えば、「○○をしていることに、全体的には満足している」といったように○○という形で提示し、「文中の○○には先に最も重要であるとしてあげた

³ 厳密に言えば、個人の活動が自己形成的活動として機能している場合に、その肯定的側面のみならず否定的側面も含まれて然るべきであるが、本研究ではこのことを意識した上で、肯定的側面に焦点を絞ったものとして捉える。

⁴ 質問紙上では、この3側面に加え「他者・友人との良好な関係性」(例えば、○○をする上で、他者や友人との関係は切っても切り離せないものであるなど、計4項目)という側面も含まれていたが、目的性-非目的性という視点から捉えていくという本研究の位置づけ上、当該項目を分析から外した。なお、当該項目を含めた場合と外した場合とで、因子分析結果(因子構造)に相違はみられなかった。

⁵ これはより深い水準の文脈を抽出するために行った方法であり、実際の分析には最後の記述を使用した。

項目を当てはめて考えて下さい」と教示を行っている。この方法により、内在的視点により抽出された活動内容と尺度得点とが密接に関連づけられ、具体的な外的活動に基づいた認知的評価として扱うことが可能になる。その上で、ここでは付与される肯定的認知評価として、(a)“個人にとって最も重要な活動に対して現在感じている充実度”を測定するための「充実感」(7項目)、(b)“その活動を行っていることによって得られる自己に対して現在感じている受容度”を測定するための「自己受容」(4項目)、(c)“現在の活動遂行と将来の目標や理想志向との連結の程度”を測定するための「自己目標志向性」(7項目)の3側面(計18項目)を設定した。なお、項目に対する評定は、「あてはまる」(5)～「あてはまらない」(1)の5件法である。

(4) 自尊感情尺度

Rosenberg(1965)の「self-esteem scale」を星野(1970)が訳した「自尊感情尺度」10項目(一次元スケール)を使用する。なお、それぞれの項目に対する評定は、「あてはまる」(4)～「あてはまらない」(1)の4件法である。

(5) 自我同一性尺度

本研究では、谷(2001)の「多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; MEIS)」を使用する。本尺度は、青年期における同一性の感覚の構造を測定することを目的としたものであり、“同一性の感覚における自己の不変性および時間的連続性についての感覚”を意味する「自己斉一性・連続性」，“自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚”を意味する「対自的同一性」，“他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚”を意味する「対他的同一性」，“現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚”を意味する「心理社会的同一性」といった4つの下位概念から構成されている。なお、各因子5項目の計20項目からなり、それぞれの項目に対する評定は、「非常にあてはまる」(7)～「全くあてはまらない」(1)の7件法である。

結 果

1. 各尺度の分析結果

自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目 全18項目の項目分析を行った結果、項目10に天井効果(平均値+標準偏差>上限値)がみられたため除外した。17項目で因子分析(最小二乗法、Promax回転)を行ったところ、固有値の落ち込みからも2因子で解釈が可能であった。

因子ごとの信頼性分析を行った結果、第1因子に寄与している項目7に関して、因子負荷量が.376とさほど高くはない値を示したため当該項目を削除した。残った16項目で再度因子分析を行ったところ、複数因子に高く負荷する、あるいは低く負荷する項目がみられないことから、単純構造の2因子解が妥当と判断された。この結果は、当初設定した3因子とは異なっているものの、第1因子には、上記の(a)と(b)の両者が含まれており、その内容からも現在の活動における充実感と自己受容は密接に関連していることが十分に伺われるため、2つの側面を1つの因子とすることは妥当なものと思われる。よって、第1因子は「充実感と自己受容」(10項目)の因子とする。第2因子は当初の設定通りであり「自己目標志向性」(6項目)の因子とする。これをもって「自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目」とする(表1)。信頼性分析に関して、第1因子は $\alpha = .896$ 、第2因子は $\alpha = .855$ といずれも高い値が得られ、信頼性は確認された。尺度の累積寄与率は56.42%であった。なお、因子ごとの平均値(標準偏差)は、第1因子が39.75(7.03)、第2因子が22.92(4.85)であった。

自尊感情尺度 全10項目について、主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分に高く寄与していたこと(.576～.794)、 α 係数が全体で.879と項目削除後よりも高い値を示していたことから、10項目一次元スケールとみなすことが妥当と考えられた。なお、平均値(標準偏差)は、25.64(5.51)であった。

多次元自我同一性尺度 本尺度は、谷(2001)によって詳細にその信頼性・妥当性が検討、確認されていることから、本研究では、ここで設定されている4つの下位尺度(「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」)に基づき得点化を行う。信頼性係数は、順に $\alpha = .892, .902, .876, .873$ と高い内的整合性・信頼性が確認された。項目は各因子5項目ずつの計20項目(7件法)であり、因子ごとの平均値(標準偏差)は、第1因子が23.64(6.48)、第2因子が21.02(6.41)、第3因子が20.24(5.50)、第4因子が21.85(5.40)であった。

2. 活動内容のカテゴリライズ

ここでは、自由記述によって表出された自己形成的活動の対象となる活動内容を全記述および重要項目ごとにKJ法(ボトムアップ的データ処理法)により分類した結果、6つの活動カテゴリー、大学における「授業・講義に関する活動」「クラブ・サークルに関する活動」、学外における「アルバイト活動」、場所の限定を

TABLE 1 自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目の因子分析結果 (最小二乗法, Promax 回転)

項目内容	F1	F2	h ²
F1「充実感と自己受容(10項目)」($\alpha = .896$)			
16.〇〇をするのは楽しい	.80	-.23	.58
19.〇〇をしているときは,自分が自分でいられるときである	.79	-.03	.65
06.〇〇をしていることで,毎日の生活が充実している	.77	.02	.63
04.〇〇をしているときの自分が好きだ	.73	.05	.59
01.〇〇をしていることに,全体的には満足している	.71	-.06	.52
14.〇〇をすることは,今の自分の支えになっている	.67	.06	.52
11.〇〇をしていると,時がたつのを忘れることがある	.61	-.10	.42
21.〇〇をしているのは,周りがそうしているからであって,特に自分でしたいと思っているわけではない*	.61	.01	.45
09.〇〇をしている中で,自分らしさを感じることができる	.60	.24	.60
02.〇〇をすることは,自分にとって意味のあることである	.47	.21	.42
F2「自己目標志向性(6項目)」($\alpha = .855$)			
12.〇〇をすることは,将来何かの役に立つと考えている	-.13	.83	.62
22.〇〇をしているのは,目標や理想があるからである	-.09	.77	.61
15.〇〇をすることは,自分の目標や理想とは関係がない*	-.06	.76	.61
05.〇〇をすることで,自分の目標や理想を実現できると考えている	.19	.71	.64
20.〇〇をすることで,何かを得ることができると考えている	.08	.64	.51
17.〇〇をすることは,社会的に見ても意味のあることである	.02	.52	.43
(*は逆転項目)	因子間相関	.29	

受けない「自己研鑽に関する活動」「遊び・対人関係に関する活動」,および主に家庭内における「生活習慣に関する活動」が得られた(TABLE 2)。選択率に着目すると,「クラブ・サークル活動」は最も選択率が高く,逆に「アルバイト活動」は最も選択率が低かった。記述数が多かった「授業・講義に関する活動」および「自己研鑽に関する活動」の選択率は中程度であった。

3. 相関係数による比較・検討

自己形成的活動に対する肯定的認知評価と多次元自我同一性との関連 自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目と多次元自我同一性尺度の関係をピアソンの積率相関係数によって検討した(TABLE 3)。その結果,全ての変数の間に0.1%水準の有意な相関関係が認められ,特に高い相関係数(.350以上)が得られたものとして,自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目

TABLE 2 表出された活動内容のカテゴリー

活動カテゴリーの内容	全記述(%)	最重要(%)	選択率(%)
授業・講義に関する活動	88(21.3)	33(23.4)	37.5
クラブ・サークル活動	53(12.8)	30(21.3)	56.6
アルバイト活動	56(13.5)	8(5.7)	14.3
自己研鑽に関する活動	89(21.5)	32(22.7)	36.0
対人関係に関する活動	67(16.2)	26(18.4)	38.8
生活習慣に関する活動	61(14.7)	12(8.5)	19.7
合計	414(100.0)	141(100.0)	

注) 選択率は,各カテゴリーの最重要項目を全記述で除算したものの。

の第1因子である「充実感と自己受容」と多次元自我同一性尺度(以下 MEIS と表記)の「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「心理社会的同一性」および“現在の自己に対する感情的評価”を測定する「自尊感情」との間に有意な相関がみられた。そして第2因子である「自己目標志向性」と MEIS の「対自的同一性」「対他的同一性」および「心理社会的同一性」との間に有意な相関がみられた。性差について,男性は女性に比べ,「充実感と自己受容」に関して「対自的同一性」「心理社会的同一性」のいずれとも強い関連を示し,「自己目標志向性」に関して「自己斉一性・連続性」「心理社会的同一性」のいずれとも強い関連を示した。女性は男性に比べ,「充実感と自己受容」と「対他的同一性」との間に強い関連が示された。

自己形成的活動に対する肯定的認知評価と自尊感情との関連 自己形成的活動に対する肯定的認知評価の2側面それぞれと「自尊感情」との間に,0.1%水準の有意な正の相関がみられた。

4. 活動文脈を考慮した自己形成的活動

各活動領域の選択理由(文脈)に関するカテゴリー化 各活動領域内において,その選択理由を内容に基づき分類した⁶(TABLE 4)。その結果,「授業・講義」では,親にお金を出してもらっているからといった“学業遂行に対する意味づけが,直接その中身に触れるものではなく,他の社会的あるいは個人的理由により選択されている”と思われる「1.学業への間接的姿勢」,大学には学びたいものがあるからといった“学業活動の遂行が本人の意志に基づくもの”である「2.学業への能動的姿勢」,そして将来の仕事につながるからといった“学業遂行が自身の将来に結びつくものとして捉えられている”「3.将来・就職への見通し」の3つ,「クラブ・サークル」では,自分を成長させてくれるもの

⁶ 記述内容のカテゴリ化に関しては,心理学を専門とするものの2名の評定の結果,最終的に96.5%の評定一致率を得た。

TABLE 3 自己形成的活動に対する肯定的認知評価と多次元自我同一性および自尊感情の相関係数

	自己受容	目標志向	自己斉一	対自的	対他的	心理社会	自尊感情
充実感と自己受容							
自己目標志向性	.265** (.29*/.25*)						
自己斉一性・連続性	.379*** (.41**/.36***)	.303*** (.38**/.23*)					
対自的同一性	.358*** (.40**/.33**)	.425*** (.48***/.38***)	.610*** (.64***/.58***)				
対他的同一性	.326*** (.26/.37***)	.377*** (.36**/.38***)	.579*** (.49***/.63***)	.485** (.40**/.53***)			
心理社会的同一性	.382*** (.53***/.29**)	.408*** (.54***/.29**)	.657*** (.68***/.63***)	.668*** (.69***/.65***)	.627*** (.53***/.68***)		
自尊感情	.393*** (.40**/.39***)	.290*** (.33*/.24*)	.562*** (.57***/.55***)	.624*** (.76***/.53***)	.522*** (.46***/.54***)	.650*** (.66***/.63***)	

注) 下段の左側は男性 (N = 52), 右側は女性 (N = 89) の相関係数である。 (*p < .05, **p < .01, ***p < .001)

TABLE 4 各活動領域における文脈のカテゴリー

活動内容	文脈カテゴリー (N =)	具体的内容例
授業・講義	1. 学業への間接的姿勢(5)	勉強しないと、何のために大学に来ているのか分からない／親にお金を出してもらっているから
	2. 学業への能動的姿勢(6)	大学進学を決めた理由が“学びたい学問があるから”ということだったから／自分がやりたいと思って叶ったことだから
	3. 将来・就職への見通し(12)	将来の仕事につながるから／大学院に進み、専門職につきたいから／自分が将来後悔したくないから
クラブ・サークル	4. 成長志向型(14)	自分の視野を広げ、成長させてくれるものだと思うから／人間関係や様々な企画を学べるから
	5. 現在重視型(16)	今が大事だから／居心地が良いから／気持ちが良いから／多くの時間を費やしているから
アルバイト	6. 成長志向型(4)	働くことによって成長できるから／楽しいからというのと、色々学ぶことがあるから／将来の仕事になるから
	7. 生活保障型(4)	生きていくための収入源／お金がないと何もできないから／お金を稼ぐため
自己研鑽	8. 成長志向型(17)	学校以外の分野で自分が一生懸命になれるから／自分の経験として成長させられるから／自分が大きくなれるから
	9. 外発的・必要型(15)	他人からどう見られるか気になる／将来職についたときにこまるから／学生だから／人間として生きるために必要だから
遊び・対人関係	10. 成長志向型(14)	人との関わりの中で私は成長していくから／様々なことが学べるから／一人ではやはり自分が分からないから
	11. 現在重視型(12)	楽しい生活を送りたいから／楽しいから／ストレス解消／話をしているとみんな結構楽しいから
生活習慣	12. 生活基盤重視型(6)	他のこともこれに支えられている／心が開放される気がするから／十分寝なければ充実した日常生活が送れないから
	13. 価値先行型(6)	生命の維持に不可欠だから／しなきゃ生きていけないから／必要不可欠だから

と思うからといった“活動遂行が未来に対して開かれた個人の成長欲に基づいている”「4.成長志向型」と、今が楽しいからといった“現在の充足のみを志向する”「5.現在重視型」の2つ、「アルバイト」では、色々学ぶことが出来るからといった“上記4.同様の側面が見出される”「6.成長志向型」と、生きていくための収入源だからといった“大学生として最低限の生活を確保するために必要であるという”「7.生活保障型」の2つ、「自己研鑽」では、自分の経験として成長させられるからといった“上記4., 6.同様の側面が見出される”

「8.成長志向型」と、将来職に就いたときこまるからといった“活動遂行が自身の意志というよりも、外発的な理由により選択されている”「9.外発的・必要型」の2つ、「遊び・対人関係」では、人との関わりの中で成長していくからといった“上記4., 6., 8.と同様の側面が見出される”「10.成長志向型」と、楽しいからといった“上記5.同様の側面が見出される”「11.現在重視型」の2つ、「生活習慣」では、他のこともこれに支えられるからといった“何をするにもまず基本的な生活習慣が大切であるという”「12.生活基盤重視型」

と、しなければ生きていけないからといった“大学生的文脈を超えて、個人の生き方観の反映ともいえる”

「13.価値先行型」の2つが、それぞれ見出された。

諸活動領域を支える各文脈カテゴリーに関する検討
上記での分類した文脈カテゴリーに基づいて、どのような文脈によって支えられたどのような活動が自己形成的活動として機能しているかに関する検討を行った。

具体的には、TABLE 4 で得られた13の文脈カテゴリーを独立変数、自己形成的活動に対する肯定的認知評価の2因子を従属変数として一要因分散分析を行った (TABLE 5)。

その結果、自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目の2側面において0.1%水準の主効果がみられたため、Tukey 法による多重比較を行った。以下、特徴的な点について述べる。

充実感と自己受容に関して、“学業への間接的姿勢によって支えられている「授業・講義 (カテゴリー1: 以下数字のみ表記)」”は、その他の群 (7を除く) よりも有意に値が低く、“成長志向型によって支えられている「クラブ・サークル(4)」「自己研鑽(8)」「遊び・対人関係(10)」および“生活基盤重視型によって支えられている「生活習慣(12)」”は、“将来・就職への見通しに支えられている「授業・講義(3)」”や“生活保障型によって支えら

れている「アルバイト(7)」”に比して有意に高い値を示した。

自己目標志向性に関して、“現在重視型によって支えられている「クラブ・サークル(5)」「遊び・対人関係(11)」”および“学業への間接的姿勢によって支えられている「授業・講義(1)」”は、“将来・就職への見通しに支えられている「授業・講義(3)」”や“成長志向型によって支えられている「自己研鑽(8)」”よりも有意に低い値を示した。また、“価値先行型によって支えられている「生活習慣(13)」”は、いずれの群よりも有意に低い値を示した。

考 察

1. 自己形成的活動に対する肯定的認知評価と自我同一性および自尊感情との関連

まず、自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目と自尊感情との相関係数を求めたところ、いずれにおいても有意な正の相関関係が認められた。「充実感と自己受容」との間の関連 ($r=.393$) について、自己受容は自尊感情を包括するものであるという指摘 (伊藤, 1989) や時間的展望の下位尺度としての現在充実感と自己評価との間に関連 ($r=.51$) がみられていること (白井, 1997) や「自己目標志向性」との間の関連 ($r=.290$) について、時間的展望の1側面である目標指向性と自己評価との間に関連 ($r=.36$) がみられていること (白井, 1997) から、本尺度は青年の適応的側面を測定するものであることが示されたことから、本尺度の妥当性が認められたと考えられる。

次に、自己形成的活動に対する肯定的認知評価と多次元自我同一性尺度との相関係数を求めたところ、全ての変数間に有意な正の相関関係が認められた。特徴的なものとして、個人が重要とする活動に対する充実感および自己受容感という肯定的側面を示す「充実感と自己受容」と「自己同一性・連続性」との間に関連が認められた ($r=.379$)。また、現在の活動遂行が将来的な目標や理想と結びついたものとして認知されている「自己目標志向性」と「対目的同一性」との間に関連が認められた ($r=.425$)。そして、自己形成的活動に対する肯定的認知評価の両側面と「心理社会的同一性」との間に関連が認められた (順に、 $r=.382$, $r=.408$)。

これらの結果より、第1に、個人が重要とする活動遂行に対し、ある程度明確な目標や理想を関連づけて捉えていることは、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されているという同一性の感覚の形成に寄与していることが示された。第2に、

TABLE 5 文脈を考慮した自己形成的活動の比較

活動内容	文脈カテゴリー	N =	充実感と自己受容	自己目標志向性
授業・講義	1. 間接的姿勢	15	33.6(7.6)	24.1(3.9)
	2. 能動的姿勢	6	41.3(4.6)	26.0(3.5)
	3. 将来の見通し	12	35.6(5.9)	26.6(2.1)
クラブ・サークル	4. 成長志向型	14	44.6(3.8)	24.5(2.9)
	5. 現在重視型	16	38.7(4.2)	19.8(2.8)
アルバイト	6. 成長志向型	4	44.0(4.2)	26.5(3.4)
	7. 生活保障型	4	30.7(6.2)	23.2(2.2)
自己研鑽	8. 成長志向型	17	43.9(4.6)	26.1(3.0)
	9. 外発・必要型	15	38.0(7.1)	23.3(4.0)
遊び・対人関係	10. 成長志向型	14	45.1(3.5)	24.0(4.6)
	11. 現在重視型	12	41.7(2.8)	20.0(3.3)
生活習慣	12. 生活重視型	6	44.6(3.9)	21.6(6.6)
	13. 価値先行型	6	38.8(4.9)	12.0(6.0)
$F(12, 128) =$			11.98***	9.21***
多重比較 (Tukey 法)			1 < 7 以外 3 < 4, 8, 10, 12 5 < 10 9 < 4, 10 7 < 4, 6, 8, 10, 11, 12	1, 5, 11 < 3, 8 5 < 2, 4 13 < 全て

注) 数値は平均値 (SD) を示す。

(*** $p < .001$, 多重比較は $p < .05$)

活動遂行に際し、認知評価の両側面が肯定的に意味づけられていることが、自分と社会との適応的な結びつきという同一性の感覚の形成に寄与していることが示された。ただし、第3に、必ずしも明確な目的に支えられた活動ではないとしても、それが充実感や自己受容感を伴うものであると認知されていることは、自分が自分であるという一貫性および時間的な連続性を持っているという同一性の感覚の形成に寄与していることが示唆された。まとめると、Eriksonが青年期の発達課題として提唱したアイデンティティ（同一性）概念を軸に尺度化された「多次元自我同一性尺度」と、本研究で作成された個人にとって重要な活動を軸に、それに付与される肯定的認知評価を測定する「自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目」との間に対応関係が認められた。これより、アイデンティティの感覚といった心理的（内的）な同一性の概念が、外的な活動に対して付与された認知的評価（自己形成）との関連によって、形成・獲得されることが可能性として示されたといえよう。

2. 文脈を考慮した自己形成的活動の相違に関する検討

本研究では、“どのような文脈によって支えられたどのような活動が自己形成的な活動として機能しているのか”について検討することを目的とした。

そこで、それぞれの活動内容における文脈の分類および文脈レベルでの得点の比較を行った。文脈の分類結果（TABLE 4）より、活動内容の面においては異なる活動を重要だと捉えているものの、文脈の水準で検討すると、例えば「クラブ・サークル」「アルバイト」「自己研鑽」「遊び・対人関係」においてみられた“成長志向型”のように、異なる内容の背景に同じ成長への志向性を読み取ることができた。この傾向は「授業・講義」にはみられず、“間接的姿勢”や“能動的姿勢”、“将来・就職への見通し”といった文脈によって支えられていた。学業以外の活動（ただし生活習慣は除く）でみられた成長文脈が学業においてみられなかったのは興味深い。確かに、学びたい学問があるからといったようにこれ自体は肯定的に意味づけられたものであるが、その他の活動でみられる視野の拡大や学びの拡大といったより広義の人間としての成長といった意味での肯定性とは若干異なるように思われる。

次に、文脈を考慮した活動内容における得点の比較（TABLE 5）より、充実感と自己受容に関して、“成長志向型によって支えられた「クラブ・サークル」「自己研鑽」「遊び・対人関係」および“生活基盤重視型によっ

て支えられた「生活習慣」をあげているものは、現在遂行している活動に対し、比較的高い充実感や自己受容感を感じていることが示された。一方、“学業への間接的な姿勢や将来・就職への見通しによって支えられた「授業・講義」や“現在重視型によって支えられた「クラブ・サークル」および“生活保障型によって支えられた「アルバイト」をあげているものは、その活動に対し低い充実感や自己受容感を感じていることが示された。大学には、教師・友人との交流、クラブ活動、空き時間を利用してのアルバイトなど多様な人間形成の場が提供されているという指摘（Bloom, 1987）にもあるように、学業以外の活動にみられた積極的な成長への意欲や充実感・自己受容感といった肯定的な意味づけはある程度納得のいく結果であるといえよう。特に、「クラブ・サークル」「遊び・対人関係」の得点が高かったことに関して、友人関係は学生生活の充実感にとって大きな条件であるといった指摘（中村・林, 1985）や、学内で多くの友人と出会うことにより、大学満足度を高めるといった指摘（浜島, 2003）にもあるように、より幅広い人間関係（交流）が得られる活動は、大学生活における充実感や自己受容感にプラスの影響を及ぼしていることが示唆された。

自己目標志向性に関して、“学業への能動的な姿勢や将来・就職への見通しによって支えられた「授業・講義」や“成長志向型によって支えられた「クラブ・サークル」「自己研鑽」をあげているものは、そこでの活動に対して高い目的意識を付与していた。一方、“学業への間接的な姿勢によって支えられた「授業・講義」や“現在重視型によって支えられた「クラブ・サークル」「遊び・対人関係」および“価値先行型によって支えられた「生活習慣」をあげているものは、そこでの活動に対して目標志向的な意味づけが行われていないということが示された。特に、将来・就職への見通しによって支えられた「授業・講義」活動の結果に着目すると、先の充実感と自己受容においては低い値を示していたが、自己目標志向性では高い値を示している。つまり、このタイプに相当する学生にとって、大学での授業や講義は、将来の理想や目標の実現のために必要不可欠なものであるとは捉えているものの、その活動自体には充実感や自己受容感を感じていないというように、手段的な意義を認めていることになる。

総じて、“成長志向型によって支えられた「クラブ・サークル」や「自己研鑽」をあげているものは、そこでの活動をより肯定的に捉えており、適応的な大学生活を送っていることが予想される。武内(2003)は、部・

サークル活動への比重が強い学生は、自己意識・自己概念が肯定的になると指摘している。加藤(1986)においても、学生は将来のための知識・技術の習得は学外で、また友達作りや仲間との交流を目的に趣味を中心とした活動を楽しむのは学内のクラブ・サークル活動であるという、これらの活動の肯定的側面が見出されている。一方、「間接的姿勢によって支えられた「授業・講義」をあげているものは、そこでの活動を否定的に捉えており、大学生活に対して不適応感を抱いている可能性が示唆された。藤井(1998)では、大学生の日常生活における様々な不安よりも学生の本分である学業に対する不安をより強く感じている傾向が示されている。半澤(2003)においても、大学生の学業に対する否定的な捉え方の重要性およびその多さ(全体の5割弱)が指摘されている。こうした大学生における学業をめぐる問題は、大学生活の重要かつ中心的活動であることや、大学教育に携わるものにとっても重要な問題であることから、より多面的な視点からの検討が必要であると思われる。

3. 本研究の意義

本研究では、従来の認知的志向性(未来次元)としての自己形成を、外的側面と内的側面の相互行為によって捉え、さらに目的側面に加え活動に対する充実感や自己受容感といった現在における肯定的意味づけ(現在次元)をも包含した概念として位置づけ(自己形成の概念拡張)、実証的にアプローチした。また、文脈を考慮した上での得点を比較検討することで、具象度の高い内容的な議論を展開することが可能となるという利点に加え、方法論的な利点もあることが示された。つまり、活動の分類を文脈でさらに分類し比較検討することで、同一活動内でも統計的な有意差が認められた。このことは、抽象度の高い活動間レベルで比較をする際に、平均値化することで相殺されてしまっている側面を文脈という切り口で浮き彫りにすることが可能になったということを意味している。表現を変えると、自由記述による個性記述的なデータを尺度による法則定立的な方法によって検討することの意義・可能性も示されたといえよう。さらに本研究の結果では、どういった活動(客観的対象や属性)が重要であるかといった視点からではなく、個人がどのようにそれらを意味づけているかといった視点から捉えていくことの重要性が示された。このような視点からアプローチすることの重要性は、山田(2004a)の他に、青年の時間的展望研究(cf. 尾崎, 1999)や職業選択研究(cf. 下村, 1998)、ストレス研究(cf. Zimmerman, 1983)など多様な領域におい

ても指摘されている。

4. 今後の課題

第1に、本研究では、学年差(発達差)や性差についての検討は行っていないが、これまでに大学生を対象とした様々な研究においてこのような視点からの検討がなされており、その意義が確認されていることから学年差や性差の検討は今後の課題の1つであるといえる。第2に、入学形態や生活形態の違いといった視点も大学生の自己形成や適応の問題を議論する上で有用な視点であると思われる。第3に、本研究では、自己形成の対象となる活動を1つに絞り込んだ上での検討を行ったが、様々な活動を同時遂行する大学生の現状を踏まえると、個人内におけるそれら様々な活動の葛藤を含む相互作用的視点を考慮する必要がある(例えば、大野(2003)は、学生のアイデンティティ形成には、授業と授業以外の活動のバランスが重要であると指摘している)。以上をまとめると、本研究で捉えた自己形成の側面は、現時点における認知された側面としての自己形成的活動の比較検討という限られた側面しか扱っておらず、今後、時間的・発達の視点・ダイナミクスをも取り入れた上での検討が求められる。

引用文献

- 安達喜美子・菅宮正裕 2000 自己像と自尊感情および自己成長意欲との関連について—理想自己をとらえる際の新たな観点を加えて— 茨城大学教育学部紀要(教育科学), **49**, 143-155.
- Bloom, A. 1987 *The closing of the American mind*. New York: Simon & Schuster. (菅野盾樹(訳) 1988 アメリカン・マインドの終焉—文化と教育の危機— みすず書房)
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: W. W. Norton & Company. (小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**, 441-448. (Fujii, Y. 1998 Construction of a scale for college life anxiety and its reliability and validity. *Japanese Journal of Psychology*, **68**, 441-448.)
- Grotevant, H. D. 1987 Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, **2**, 203-222.
- 浜島幸司 2003 大学生活満足度 武内 清(編)

- キャンパスライフの今 玉川大学出版部 Pp. 73-90.
- 半澤礼之 2003 大学生の学業の捉え方についての自由記述分類—肯定的ではない捉え方に着目して— 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 96.
- 速水敏彦 1998 自己形成の心理—自律的動機づけ— 金子書房
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(2) 児童心理, **24**, 1445-1477.
- 井上光一 1999 自己受容における向上心とあきらめ 京都大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 406-418.
- 伊藤美奈子 1989 青年期自我形成過程における自己受容研究の意義と視点 青年心理学研究, **3**, 20-28. (Ito, M. 1989 The significance and viewpoint of self-acceptance studies in process of adolescent ego-formation. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **3**, 20-28.)
- 梶田徹一 1988 自己意識の心理学[第2版] 東京大学出版会
- 加藤 悦 1986 学生生活意識と実態—余暇活動を通じて現代学生気質を探る— 東京学芸大学紀要(第6部門), **38**, 95-108.
- 菊池則行 1989 青年の自己形成要求に関する研究—大学生を対象として— 青年心理学研究, **3**, 1-9. (Kikuchi, N. 1989 A study on the demands of the self-development of undergraduates. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **3**, 1-9.)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258. (Miyashita, K. 1987 An examination of the Japanese version of Rasmussen's ego identity scale. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **35**, 253-258.)
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係—個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係— 教育心理学研究, **45**, 62-70. (Mizokami, S. 1997 The relationship between regulating factors of self-evaluation and self-esteem : Relationship between inner and outer frame as an idiographic approach. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 62-70.)
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—実証的心理学的パラダイム— 金子書房
- 溝上慎一(編) 2001 大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学— ナカニシヤ出版
- 溝上慎一 2003 青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相—青年の内在的視点と固有の文脈を考慮して— 京都大学大学院教育学研究科博士学位論文
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価および自己形成意識の関連について 教育心理学研究, **46**, 131-141. (Mizuma, R. 1998 A study of relationship between an ideal self and self-esteem, and consciousness to self-formation. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 131-141.)
- 水間玲子 2002a 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について— 青年心理学研究, **14**, 21-39. (Mizuma, R. 2002a The meaning of intention toward ideal self : An investigation on positive and negative aspects of it. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **14**, 21-39.)
- 水間玲子 2002b 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **48**, 429-441.
- 森野礼一・池上知子 1986 学生生活における充実感の構造分析 神戸女学院大学論集, **95**, 15-27.
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.
- 中村昭之・林 潔 1985 学生生活の充実感について(2) 駒沢社会学研究, **17**, 128-152.
- 岡田 努 1998 アイデンティティ研究における質問紙調査の問題点 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, S32-S33.
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, **32**, 100-109. (Ohno, H. 1984 The fulfillment sentiment in contemporary adolescence : An examination of the sentiment model for contemporary Japanese adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **32**,

- 100-109.)
- 大野道夫 2003 社会意識 武内 清(編) キャンパスライフの今 玉川大学出版部 Pp.152-166.
- 尾崎仁美 1999 青年の将来展望研究に関する一考察—将来次元の重要性を考慮する意義— 大阪大学教育学年報, **4**, 87-99.
- Rasmussen, J. E. 1964 The relationship of ego identity to psychological effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy : Its current practice, implications and theory*. Boston, MA : Houghton Mifflin Company.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Rosenthal, D.A., Gurney, R.M., & Moore, S. M. 1981 From trust to intimacy : A new inventory for examining Erikson's stages of psychosocial development. *Journal of Youth and Adolescence*, **10**, 525-537.
- 下村英雄 1998 大学生の職業選択における決定方略学習の効果 教育心理学研究, **46**, 193-202. (Shimomura, H. 1998 The effects of learning the decision-making strategy in vocational decision-making in undergraduates. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 193-202.)
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55. (Sugimura, K. 1998 Identity formation and relatedness in adolescence. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **9**, 45-55.)
- 杉村和美 2001 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因 発達心理学研究, **12**, 87-98. (Sugimura, K. 2001 A longitudinal study of relatedness in identity formation of female adolescents. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **12**, 87-98.)
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, **27**, 215-220. (Sunada, R. 1979 A study on ego identity related to self-concepts. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **27**, 215-220.)
- 高村和代 1997 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, **45**, 243-253. (Takamura, K. 1997 Process of identity transformation at task exploration. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **45**, 243-253.)
- 武内 清・浜島幸司 2003 部活動・サークル活動 武内 清(編) キャンパスライフの今 玉川大学出版部 Pp.31-41.
- 田井康雄 1982 世代間の教育と自己形成 奈良大学紀要, **11**, 119-131.
- 田井康雄 1990 人間形成における自己形成の意義について 奈良大学紀要, **18**, 1-17.
- 高橋 勝 1992 子どもの自己形成空間—教育哲学的アプローチ— 川島書店
- 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273. (Tani, F. 2001 Structure of the sense of identity in adolescents : Development of the Multidimensional Ego Identity Scale (MEIS). *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 265-273.)
- 山田剛史 2003 青年期の自己形成に関する研究の概観と展望—現象 (リアリティ) 理解のためのトライアンギュレーション— 人間科学研究, **11**, 165-177. (Yamada, T. 2003 Review and perspective tasks on self-development in adolescence : Triangulation for understanding reality. *Human Sciences Research*, **11**, 165-177.)
- 山田剛史 2004a 過去—現在—未来にみられる青年の自己形成と可視化によるフレクシオン効果—ライフヒストリーグラフによる青年理解の試み— 青年心理学研究, **16**, 印刷中. (Yamada, T. 2004 Self-development of adolescence in terms of past-present-future and effects of reflection by visualization : An attempt to understand adolescence by the life-history graph. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **16**, in press)
- 山田剛史 2004b 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究, **12**, 59-72. (Yamada, T. 2004 Self-development of college students in terms of ideal self. *Japanese Journal of Personality*, **12**, 59-72.)
- Zimmerman, M. 1983 Methodological issues in

the assessment of life events : A review of issues and research. *Clinical Psychology Review*, 3, 339-370.

謝 辞

本論文の作成にあたり，貴重なご助言を頂きました京都大学高等教育研究開発推進センター助教授の溝上慎一先生，奈良女子大学助手の水間玲子先生，京都ノートルダム女子大学講師の尾崎仁美先生に心よりお礼申

し上げます。また，本論文の査読過程において，担当の諸先生方から多くの重要なお指摘・ご教授を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

付 記

本研究の一部は日本発達心理学会第14回大会および日本教育心理学会第45回総会（ともに2003年）において発表されました。

（2003.1.7 受稿，'04.8.2 受理）

Self-Development and Identity in Contemporary College Students : Daily Activities and Their Context

TSUYOSHI YAMADA (GRADUATE SCHOOL OF CULTURAL STUDIES AND HUMAN SCIENCE, KOBE UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 402-413

The present study investigated how the daily activities of contemporary college students function as activities related to their self-development. Analysis of questionnaire responses of 141 college students revealed the following results: (1) A relationship was found between the affirmative evaluation of self-development activities and ego identity. This result suggests that internal identity concepts, such as identity feeling, are formed and achieved in relation to an affirmative evaluation of outward activities (self-development). (2) Fulfillment and self-acceptance were shown to be supported by a development-oriented context in students' leisure-time activities and personal relations, and by a living-oriented context in students' lifestyles. Also, orientation to self-goals was supported by a future-perspectives context in the students' class/lecture activities, and a development-oriented context in students' self-improvement activities. It was concluded that the content of self-development activities has different functions, depending on the context.

Key Words : self-development, identity, daily activities, context, college students